

【論 文】

子どもの表現活動についての一考察

濱 崎 久 美

A consideration on Children's Expression activity

Kumi HAMASAKI

はじめに

『保育所保育指針』の第1章（総則）3.保育の原理(1)保育の目標には「(カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」とあり、第3章保育の内容のオ表現には「考えたことや自分なりに表現することを通して、豊かな表現する力を養い、創造性を豊かにすること」とある。この目標を達成するためには子どもたちがより良い体験ができる環境を整え、子ども自身が日々の生活の中で自分の身体を使って体験することが必要である。

しかし、子どもたちを取り巻く環境、特にデジタルメディア社会の環境には経験活動を阻害し、自分で考え、行動することを抑圧してしまう要因が見られる。特に近年、幼児を取り巻く環境の急激な変化は幼児の表現活動に少なからず影響を与えている。子どもの生活圏をみると自然環境や子どもの遊び場が減少し、人間関係においても様々な面で個別化し、電子機器の発展によって他を介さないダイレクトな関係が好まれ、価値観も多様化してきている。実際、子ども達はデジタルメディア社会の中で生まれ育ち、その文化を多く吸収している。そのため、身体感覚を介して本質に触れる機会が減少しているという事実は否めない。また対人関係においても、繊細ではあるが不器になってきている一面がある。

一見便利に見えるデジタルメディア社会だが、心身の調和的発達段階にある子どもにとっては活動が制限されるため、身体感覚を通しての情報が乏しくなってしまう表現活動に必要な基礎力が十分に培われない可能性がある。本来、幼児の表現は生活における行為の全てであり、表現活動は生活に直結し、生きていることを証明するものである。だからこそ、実際に自分で体験した感覚を基礎とする生活を重視する必要がある。

このような幼児の基礎作りのために、保育所保育指針、第3章では5領域と「生命の保持」、「情緒の安定」に関わる保育の内容において、「子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるもの」とであると述べられている。今回はこの子どもの表現活動の基礎づくりに視点をあて、モンテッソーリ教育と保育所保育指針の立場から5領域の相互関係について検討したい。

そこで本稿では、以上のことを踏まえながら、1. 子どもの表現活動の基礎について、2. 表現活動の位置付けについて、3. 保育者の役割についてという3つの視点から考察する。

1. 子どもの表現活動の基礎について

表現活動の1つ造形表現について林健造氏は「造形表現の過程には必ず通過するであろう3つの要素があると」述べている¹。その要素とは想像の系、技能の系、伝達の系の3つであり、「三系論」という。つまり造形表現をするにあたって、まず創作者がイメージを持つ過程、次にイメージを具体物にするための技術を培う過程、最後にイメージを具体化し作品に創作者のメッセージを込めるといった過程があるということである。これは表現活動全般にも当てはまる理論である。そこで、ここではこの「三系論」を考慮しながら、それらが子どもの中でどのように培われるのかということをも1. 想像する子どもと表現活動、2. 整備された環境と表現活動、3. 運動の調整と表現活動というモンテッソーリ教育の3つの視点から考察する。

1) 創造する子どもと表現活動

モンテッソーリは母親の胎内という環境の中で、受精後身体、諸器官を自分自身で作りあげていく身体的胎児に対して、出生後の乳幼児を精神的胎児と位置付けた。なぜなら、この世に生を受けた瞬間から子どもには、自分を開花させ人格を完成させるための生命力が備わっており、周囲の環境に自らの身体を介して働きかけることで、知性や精神機能の複合体を創造するという内的な仕事を与えられているからである。²このため、モンテッソーリはこの乳幼児期の子どもを特別に「創造する子ども (a kind of creativeness)」³と呼んでいる。

また、彼女は子どもが「人間を形成する使命」⁴を持ち、そのために活動し、継続する創造の営みを行うこと、更に、幼児の建設的動作が「知識に基づく精神的イメージから出発する」⁵ということも指摘している。これは、林氏の「想像の系」と同じ視点であるが、モンテッソーリはあえてここでは「創造」という言葉を使うのである。なぜなら、彼女は子どもの表現活動が体験を通して得た知識を基礎としてイメージを作り上げそれを表現しようとしたときに作品となるだけではなく、そこに人間を造りあげる子どもの姿を見ていたからである。つまり、表現活動とは子どもが自身の成長のために経験したことが蓄積され、知識となった経験を用いて日常生活の中で更に心身ともに成長、発達できるよう活動することで現れてくるものなのである。子どもにとって、自分自身を造りあげる活動全てが表現につながり、経験の全てが表現活動の基礎となるのである。

このように、子どもは環境に自ら働きかけて感覚を刺激し、多くのことを吸収しながら自分自身を創造していく。自己を開花するために、日々の生活の中で心身が体験した身体感覚が基礎となり、成長発達する中で、表現活動への道を開くのである。このことから、

自己を創造する過程の中に表現の萌芽が存在し、同時に体験によって培われる心の生活が表現活動の基礎となるということが理解できる。

2) 整備された環境と表現活動

では子どもが自己を開花させる環境とはどのようなものなのだろうか。ここでは整備された環境という視点から表現活動を見ていく。

子ども達の生活環境は一人ひとり違うため表現の基礎となる体験の質や量、それを受け止める子どもの感受性、また受けてきた援助など様々な面で違いがある。そのため、活動の中で見えてくる表現も一人ひとり違ったものであることは言うまでもない。保育者はそれを個々の表現として受け取ることが大切であり、その上で個々の表現を生かし、より豊かにする環境を整えることが重要であると考えられる。

モンテッソーリ教育においても、まず「整えられた環境」を準備することが求められる。同時に子どもの「内面的な欲求」を満たすために、活動の自由を保障することをも重視している。モンテッソーリは「環境から獲得することにより生活を豊かにし、事実に基づく知識と経験により精神を豊かにさせ」その上で「自由に成熟させれば、自由な発達において想像力が表示される」と述べている。⁶これは子どもが与えられた環境の状況に応じて、自分の存在を築きあげ、見聞きし体験したことによって精神の一部を形成し、自身の内で「受肉化」⁷するためである。この「受肉化」は新生児が持っている精神を目覚めさせ、五体の筋肉や言葉の発声器官を意志によって働かせるという能力のことを意味している。そのため、子どもの表現活動を豊かにさせるには、活動の自由と精神活動を伴う筋肉運動ができるよう整えられた環境設定をしなければならないのである。

このことから適切な環境がいかに重要であるかが分かる。更に彼女は環境に働きかける子どもの特性の一つである「敏感期」を取り上げている。この「敏感期」は子ども自身の内的欲求の現れであり、多くの場合、子どもは手を使ってその欲求を満たしている。秩序なく活動していた子どもが、静かになり一つの活動に集中している時、この子どもは「敏感期」にマッチした内的欲求を満たす活動に出会っているのである。

また、彼女は「自分の手と経験を通して人間が作られる」こと、「手が人間の知性の道具」であるということも述べている。⁸子どもが手を使って経験し多くのことを吸収している時、子どもの知性も働き、試行錯誤しながら得た情報を整理し知識として蓄え、蓄えたものを形として表現するために活動を始めるのである。

もし、子どもがこの活動を通して内的欲求を十分満たしたならば、自立心の成長と共に自然に他者へと向かい社会的活動も充実してくる。つまり積極的に誰かに伝えたいという思いが子どもの中で膨らみ、それが様々な形で表現として現れてくるのである。

このように、子どもには内的欲求を満たす内外の適切な環境が必要であり、活動を通して精神が満たされたならば生き生きと自己を表現し、同時に社会性も芽生えてくる。だからこそ、子どもが豊かな情報を吸収し、技術を培いながら表現活動の基礎を築いていくことができる整えられた適切な環境が必要なのである。

3) 運動の調整と表現活動

ここでは「技術の系」に関する側面から、運動の調整と表現活動の関係を観てみよう。

モンテッソーリは知性が刺激への反応、観念の連合を素早く行うものであり、感覚のうちにあるものを整頓することから始めるという。⁹また、彼女は大人が現実を空想で固め、子どもの想像力を発達させようとしているがそれは間違いであると指摘している。¹⁰これは、子どもの創造の準備が現実にしかりと結び付いていればいるほど創造性のある想像力が実りあるものとなることを示している。つまり、科学的な発見と同様に、事実の観察を基に想像された所産であればあるほど、美も芸術作品も、生き生きと活気に満ちたものとなるということである。

このことは、表現活動において現実の生活との結びつきがいかに必要であるかということを示しているといえる。そして、この現実との結びつきの要素の一つが運動の調整なのである。これは、林氏の「技術の系」と同じ視点である。この運動の調整は子どもが視覚、触角、筋肉感覚を作用させ、脳と運動感覚が結び付き、さらに繰り返し活動することによって筋肉に記憶され、身についてくるものである。3歳以降は自分の意思によって随意筋の調整を行うようになるため道具を意識的に使うようになり、繰り返し活動することで目と手の協応動作や手の機能が発達し、その技術が精練される。つまり、幼児期は実際の経験を重ねることで筋肉がその動きを記憶し、運動調整を行い、自らの運動を完成させる時期なのである。

もし、この幼児期に日常生活における運動調整の基礎を作る作業を邪魔されるならば、子ども達は後になって苦労して身につけなければならなくなる。しかし、現代の日常生活を見ると便利な電化製品で溢れているため、日常生活で行うことができる子どもにとっての身近な運動の機会が失われている。特に表現活動で必要な書くことや描くこと、切る、貼るなどの活動に用いる道具の使い方、折る、積む、重ねる、通すなどの手の器用さに必要な活動が十分できないのである。

本来子どもは、活動的であるため、大人と違って機能性や便利さを求めない。掃除、洗濯も自分の手を使って活動したいのである。このように身近な生活の作業も、子どもにとっては大切な運動調整の機会なのである。子どもは自分の意志で自分の思うように身体を動かすことができるようになる必要がある。なぜなら、イメージが閃き、それを表現しようとするとき、必要な技術を使って表現できると同時に、その表現は精密でより具体化したものになるからである。しかし、子どもにとっては結果だけではなく、その活動過程が大切であり、自分で選び、活動し、やり遂げることが子どもにとっての充実感、満足感につながるのである。

このように、現実の世界において子ども自身が具体的に経験し繰り返し活動することによって、運動が筋肉記憶として残り、運動の調整ができるようになるため、結果的に表現活動の基礎が作られ、表現活動が豊かになるのである。

2. 表現活動の位置づけ

ここでは、表現活動の位置付けについて、まずモンテッソーリ教育と表現活動について事例を交えながら考察し、次に保育所保育指針の5領域の相互関係を見ていく。

1) モンテッソーリ教育と表現活動

モンテッソーリ教育は一般的に、日常、感覚、言語、数、文化という五つの分野で教具が分けられている。ここには5領域で言う「表現」という言葉がない。何故であろうか。

モンテッソーリはその著書の中で、「私たち自身は線画も塑像の授業もしませんが、それでも私らの子どもの多くには花や鳥や景色、進んで自分で考え出したスケッチをうらやましいまでに描きます。」¹¹と述べている。彼女は手と感覚の訓練が、ただ文字を書くためのものではなく表現的な図画のためでもあること、そしてこの様な表現活動を表現活動として教えるのではなく、生活の中で具体的な援助をすることで、結果的に表現手段の援助となり、豊かな表現活動に結び付くと述べている。¹²これは、他の領域においても同様である。日常生活には運動の調整や指先の機能訓練が含まれ、感覚教育には五感を通して吸収された様々な印象を知性の働きと共に整理していく過程があり、数も法則性の美しさや見通しを持って物事を捉える力を獲得させ、文化においては歴史、地理、生命などに関する内容によって感性が磨かれるのである。

つまり、モンテッソーリ教育における5つの分野全てに表現活動の要素が含まれているということである。逆説的に言い変えるならば、モンテッソーリ教育では表現が各領域を繋ぐパイプの役割として捉えられていると考える。なぜなら、各領域の活動を通して子どもの内に培われたものが総合されて、表現活動として表れるからである。それは生命の営みでもある。ここで、その一例をあげる。

年中のSちゃんはクロスステッチをしたくてたまらなかったが、まだ玉結び、玉止めがうまくできない。そこで、先に玉結び、玉止めのための活動をするよう声を掛け、提供を行った。初めはなかなかうまくいかず、投げ出すのではないかと思っていた。しかし登園すると、楽しそうに様々な色の毛糸の中から一つを選んで道具箱に入れ準備し活動を始める姿が見られた。徐々にコツを掴みきれいにできるようになっていった。Sちゃんのお仕事ファイルには何枚も様々な毛糸で玉止め玉結びされた作品が綴じられていた。(間の活動を略する) Sちゃんは「次はこのクロスステッチね。」と言って、自分でクロスステッチ用の用紙を持ってきて色を塗り始めた。色塗りが終わると目うちで要所に穴をあけ、手際良くクロスステッチを刺し、きれいな作品として完成させた。この時にはほとんど、自分ひとりで出来るようになっていた。それまで、様々な活動に目移りして落ち着きのなかったSちゃんだったが、この活動の後からは落ち着きを見せ、他のことにも生き生きと取り組み始めた。

これは縫うという日常領域の一つの活動であるが、クロスステッチをするためには、縫うという活動を段階的にやってきたことと同時に、升目を数えられること、刺していく順

番、法則性を理解していること、糸を引く時の力の入れ方、コツを身につけていることなどが必要である。使用するものの名称も覚え、縫う、クロスステッチという文化にも触れることになる。そして、クロスステッチができることで、様々な活動に発展していく可能性を広げることにもなるのである。

この事例は室内の活動であったが、モンテッソーリ自身は自然科学も専門にしていた。彼女は戸外に子ども達を連れだすことや、栽培、飼育も子ども達の活動に取り入れている。そしてこれらの活動を子ども達が好んで行うとも述べている。これらの活動も、生活の一部である。彼女は本物に触れること、自然の神秘、目に見えないものへの敬意など、人格形成に重要な要素は取り入れている。それは、子ども自身の内的欲求がそれらを求めたからである。そしてここで培われた内的要素もまた表現活動において重要な基礎となるのである。

このように、幼児の表現活動の裏には全ての領域が統合されて表現されていることが分かる。そのため、表現活動は子どもの精神と身体の成長の過程や今の子どもの状態を具体的に示すもだといえよう。

2) 5領域の相互関係

では『保育所保育指針』における5領域はどうであろうか。先にも述べたが、子どもの遊びや生活を通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されなければならないことが示されている。モンテッソーリ教育の場合はそれぞれの領域のねらいや目的、方法がはっきりしているため、日常生活の練習、感覚、言語、数、文化教育とはっきりした分野に分けられていた。しかし、『保育所保育指針』の5領域はねらいや内容が示され、方法のための材料は豊かに用意されているが、方法そのものは各園にゆだねられているところがありはっきりと打ち出されていない。

この点について、保育所保育指針の解説書には「保育指針に示された内容の趣旨を踏まえ、各保育所でねらいと内容をバランス良く構成していきながら、保育所の独自性や創意工夫が十分に促され、子どもの生活と遊びが豊かに展開されるようにしていくこと」¹³と記されている。そのため保育の中で、子どもに保育のねらいや内容をどのような方法で経験させるかという点において保育者の創意工夫が求められるのである。

さて、表現にはねらいが3つ挙げられ、10の内容が示されている。内容を見るとそこには健康、人間関係、環境、言葉に関する用語が見られる。健康に関することでは、「素材に触れて楽しむ」「歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ」、「演じて遊ぶ」などがある。人間関係では「保育士等と一緒に」、「伝え合う」などがあり、表現活動には合唱や合奏、劇、製作など友達と協力して行う活動が多くある。環境においては「素材に触れる」、「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香など」、「様々な出来事に触れて」などがある。言語は「伝え合えあう」、「言葉などで表現」などがあり、表現が他の領域としっかり関連していることが分かる。子どもの生活において5領域は単独ではありえない。

つまり、表現はやはり他の領域で培われたものを総括している活動なのである。自分が得たものを表現することにより、また新たな課題を持って他の領域で自分を培い、そこで得たものを用いてまた表現するというように他の領域の間を行ったり戻ったりしながら、高めていくのである。

保育者はこの点をしっかりと意識して、子どもと関わる必要がある。表現活動に困難さを感じている子どもを見たときに、それが言葉の問題なのか、運動機能、技術面なのか、健康上のものなのか、心理的のものかなどをしっかりと把握していく必要がある。このような総合的視野を持つてみるのが、子どもの生活や遊びを豊かに展開することにつながると思う。

以上のように見てくると、子どもにとって表現とは生命の営みであり、同時に生活の全てが表現活動の土台を作るということが分かる。また、モンテッソーリ教育、保育所保育指針の双方においても表現活動は各領域の基礎を習得し総括することで豊かになり、同時に次のステップに導くものであると考える。

3. 保育者の役割

さて、これまで表現活動と子どもの活動の関連を観てきたが、ここでは保育者の役割について考察する。

保育者は子どもの表現を受け止めるという大切な役割がある。乳幼児は特に自分の気持ちを十分意識化できず、それを表す技術も十分ではなく、調整することも身につけていない。それだけに、行動や状態の中から子どもの気持ちを注意深く読み取り、受け止め、適切な対応をすることが求められる。

また、表現が具体的に表せるようになり、社会性も育ってくると、保育者は子どもの表現としっかり向き合い丁寧に応答し共感することが重要になってくる。そのやり取りの中で豊かな感性を含んだ心の働きが育つのである。それは、応答の楽しさによる自己充足感と信頼に結ばれた安心できる豊かな人間関係である。また共感による快さ、新たな気づきや思いを広げ、お互いが育ち合う場となるのである。

次に、表現への誘いかけやイメージづくりの援助も必要である。強要するのではなく、「どうしたの」「何がしたいのかな」「どう思う」など自然な誘いかけに心がける必要がある。そして、イメージづくりにおける主要な条件は、子どもたち自身の直接の経験だといえる。経験はイメージの下地を作り、その子だけの具体化され、個別化された生氣あるイメージによって豊かな表現へと導かれるのである。

また、先にも述べたが子ども自身が環境に働きかけ、多くのことを学び、自己を創造していく。だからこそ、子ども達の感じ、考える心にとって豊かな刺激となるよう環境を準備しなければならない。そのためには、表現の媒体となる用具を子どもの身近に準備しておくこと、ある程度、子どもの表現を予想して、子どもが主体的に活動できるように整えておくことも保育者の役割である。

最後に、保育者自身が体験することで感性を磨くことは子どもと関わる中で重要である。自分が体験し、そこで考え、感じていなければ子どもに共感することができず、子どもの必要にも気付くこともできない。そのためにも日常的な自分自身の表現を見つめなおし、豊かな表現とセンスを身につけるよう努めることが必なのである。

また、子どもの表現活動を観る保育者の受け止め方も重要である。見栄えの良い作品としての評価対象として観るのではなく、その作品に込められている子どもの思い、またその過程の全てを表現として観る目を持ちたいものである。

おわりに

以上のことから、表現とは子どもの生命の営みに直接関わるものであり、表現活動とは子ども達が日常生活の中で心と体と頭を使って経験したことの全てを関連付け、統合したものを表わす活動であることが観えてきた。そして想像の豊かさは、自分の身体を使って具体的に体験することによって獲得した豊かさと比例することも再確認できた。表現活動はその要素を各領域の中に持ち、それらがパイプとなって各領域を包み込む役割を担っているといえよう。

モンテッソーリは「一人で出来るように手伝って」という子どもの声を絶えず聞いていた。この声は、現代の子ども達も変わらないはずである。人間の基礎作りをしているこの時期、しっかりとその土台を築けるように援助したいものである。そのためにも、表現活動における作品を鑑賞や評価という狭い意味で捉えるのではなく、全領域との繋がりの中で子どもの成長や心情の表現として捉えることが大切な視点ではないだろうか。

最後に、現代において自然環境に恵まれている園はそれほど多くはないように思われる。そのような中で、モンテッソーリ教育における表現活動の捉え方は、大きな意味を持つ。基礎の形成という部分では今の現代社会だからこそ重視すべきで視点であるから考えるからである。また、保育の中で5領域を総合的に展開させることの意味をしっかりと意識することも重要である。だが、この点についてはまだ十分検討することができなかった。今後の課題としたい。

¹ 林建造著『表現過程における三系論』日本保育学会大会研究論文集 (28)、159-160、1975-05-17

² モンテッソーリ著 武田正實訳『創造する子供』、エンデルレ書店、1973年、23頁。

³ M. Montessori, *The Absorbent Mind*, (Trans. by. Claremont, C. A.) P. 23.

⁴ モンテッソーリ著 鼓常良訳『幼児の秘密』国土社、1967年 p. 224

⁵ モンテッソーリ著 吉本次郎・林信二郎訳『モンテッソーリ教育：六歳～十二歳まで』あすなろ書房、1974年 p. 100

⁶ モンテッソーリ著 阿部真美子訳、『自発的活動の原理』明治図書、1990年 p. 199

⁷ モンテッソーリ著 鼓常良訳『幼児の秘密』国土社、1967年 p. 42

⁸ モンテッソーリ著 武田正實訳、前掲書 p. 28

⁹ モンテッソーリ著 阿部真美子訳、前掲書 p. 166

¹⁰ 前掲書 p. 197

¹¹ モンテッソーリ著 鼓常良訳『子どもの発見』国土社、1971年 p.318

¹² 前掲書 p.318

¹³ 厚生労働省編『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2008年 p.55

参考文献

黒川健一編『保育内容「表現」』ミネルバ書房、2006年

日本保育学会編『戦後の子どもの生活と保育』相川書房、2009年

モンテッソーリ著 阿部真美子訳、『自発的活動の原理』明治図書、1990年

モンテッソーリ著 鼓常良訳『幼児の秘密』国土社、1967年

モンテッソーリ著 鼓常良訳『子どもの発見』国土社、1971年

モンテッソーリ著 吉本次郎・林信二郎訳『モンテッソーリ教育：六歳～十二歳まで』あすなろ書房、1974年

市丸成人・松本静子共編『モンテッソーリ教育の理論と実践』エンデルレ書店、1987年

クラウス・ルーメル監修『モンテッソーリ教育用語事典』学苑社、2006年